

## レファレンス

### コーナー

デジタルライブラリー

## 電子図書館で邦文 初のアフガニスタ ン資料を探す

泉沢久美子

アフガニスタンへの関心の高まりをきっかけとして、一九三五年に日本人で初めてアフガニスタンへ農業技術指導に赴いた故尾崎三雄氏が現地で蒐集した膨大な資料が俄かに話題となった。その一部が当図書館に寄贈され、公開に向けて現在作業中である。意外に日本とアフガニスタンの関係は古いかもしれない。

では、日本で最初に誰が、いつ、なぜ、アフガニスタンに関心を持ったのだろうか。明治以降の現存する資料を最新のツールで探してみたい。昨年から公開されている「近代デジタルライブラリー」(<http://kindai.ndl.go.jp/index.html>)以下、近代DL)がそれである。国立国会図書館が所蔵する明治期刊行図書約一六万八〇〇〇冊のうち、平成一五年八月現在で約四万七〇〇〇冊が画像データベース化されている。近代日本の曙を映す膨大な資料がインターネットを

通じて居ながらにしてすぐに閲覧できるもので、非常に興味深い。国会図書館では明治期の刊行物の多くはマイクロフィルムでしか閲覧できなかったが、そのフィルムが画像化されたもので、書誌事項からだけでなく目次からも検索でき、直接、該当頁にジャンプすることもできる。

では、アフガニスタンについて探してみよう。しかし、国会図書館でも未所蔵の資料がありうるので、まず調べをする。インターネットの検索エンジンで必ずヒットするのが「アフガン情報」(モハバット・セキナ作、<http://village.inetweb.ne.jp/~atghan/>)だ。このサイトには図書・雑誌記事索引(堀込静香編『アフガニスタン文献目録稿』アフガニスタン協会 一九八〇年)を基に追補したものや新聞記事、年表など実に詳細な情報が載っている。これによると、①「原道要史」(ジュリイ著・相良尚辰訳「萬國史」)が最も古い。これは『明治仏教思想集成第六巻』(同朋舎 一九八二年)の中に復刻されているので入手しやすい。同書によると②は版權免許が一八七八年二月で、刊行は一九七九年初夏と推定されている。しかし、本文中のインドに関して「アフガニスタン皮路直担ノ兩國二隣ス」とあるのみで、残念ながらアフガニスタンに関する記述はない。次に、③柴田六郎編『亜富汗斯坦戦誌概略』(陸軍文庫 一八八一年)がある。日本アラブ関係国際共同研究国内委員会編

『日本におけるアラブ研究文献目録 一八七五—一九七九』(アジア経済出版会 一九八一年)も参照してみよう。これは中東に関する日本語文献を刊行年順に掲載しているのが研究動向を追うのに便利だ。土耳其、猶太、埃及に関する文献の次に④がある。やはり早くからアフガニスタンに関心があったようだ。だが、②刊行の前年の一八七九年に、③高橋基一訳『英魯中部亜細亜葛藤記』(稲田政吉刊 三八ページ)がある。もしかすると中部亜細亜とはアフガニスタンのことかもしれない。

では、近代DLへアクセスしてみよう。本文を読むにはGIF画像が専用の「閲覧用ビューワ」をサイトからダウンロードして使う。データは旧字体も新字体で入力されている。カナでも検索可能だ。②を検索するが、ヒットしない。著作権等の関係ですべてを収録しているとは限らないという。大学図書館総合目録Webcat(<http://webcat.niac.jp/>)で検索しても見つからない。これを読むには国会図書館に足を運ぶしかなく、半日仕事になる。では③を検索してみる。ヒットする。「本文」の上を押すと、本のページを捲るように見開きページごとの画像が表示される。印刷とダウンロードは全ページ一括ではできず、一ページずつコマ送りして印刷するか、GIF形式で一ページずつダウンロードするしかない。さて、本文冒頭を読むと「ア業加坦ノ地理。亞業加坦國ハ中央亞細亞ノ

獨立國ニシテ……」とある。確かにアフガニスタンに関する文献だ。「ア富汗斯坦」「ア富汗斯坦」よりも①にもあった「ア業加坦」の方が古い漢字表記法である。次に「アジア」で検索してみる。二十七件あるが、どれも関係がない。「アフガニスタン」で探すと、④引田利章編『ア富汗斯坦地誌』(陸軍文庫 一八八五年)だけがヒットする。さらに一八七八年以前の文献を検索するが、ない。やはり、今探した限りでは③が最も古い。

では、高橋基一とはどんな人物なのか。国会図書館OPAC(<http://opac.ndl.go.jp/index.html>)で検索すると、一六件もヒットする。特にアフガニスタンの専門家ではないようだが、明治期の雑誌『国民の友』にも何回か執筆しているのがかなりの知識人であったと推測される。②③④とも英米の地誌や外電を翻訳し編集したもので、一八七八年に起きたアフガニスタンでの英露の衝突に注目して国情調査を始めたことが記されている。この国は一世紀以上も前から隣国や列強の介入に翻弄されていたことが改めてわかる。②と④は陸軍文庫からの刊行である。幕末・明治初期には列強諸国からいかに日本の独立を守るかが軍部の最大関心事のひとつであった。遠いアフガニスタンでの英露確執も対岸の火事ではなかったと想像される。

(いづみさわ くみこ/図書館資料情報相談室長)

\*筆者の所属等は9月30日現在のものを使用しています。